



大阪難公佐野屋橋小住三栄田大講義其の孫一太郎ハ
 當年三歳七ヶ月のとき
 書をきき久字をうけ説教
 をなげまゝと哥を詠じ

二月三日の朝雲のありきれば

朝はやくたきて日の出をれりみじかにゆきさるる日の影ハ

見る事もなかく

此哥れの健がり旋頭哥の調とたなあり

お祖父依き雪のふるの小佐むならむとなく帰りの

またれぬるよあ



小児の詞なれば雅味なりとて

とも實なる希代の才見

吉来もよく聞くらば大可重あること

新聞二百九十三号を見

大阪日々新聞紙 九号



小佐野屋橋

三栄田

百九一